

# 実習事前指導における模擬保育ビデオを活用した カンファレンスの実際と効果

## A Study of the Practice and Effect of Conferences Using Micro-Teaching Videos During Orientation for Child Education Training

上 村 晶

Aki Uemura

### (要約)

本研究は、実習事前指導において模擬保育及びビデオカンファレンスを実施する中で、学生の気づきの実際を探ると同時にその効果について検証することを目的とする。学生が主体的に立案・実践を行う模擬保育の様子をビデオによって収録してビデオカンファレンスの場を設け、学生の気づきに関する自由記述及び質問紙調査の解析を通して、保育を見つめる観点の傾向や推移について分析した。その結果、学生が自分自身の姿を見つめ直したり他者の意見を聞いて自身の考えを捉え直したりすることで保育に対する見方が広がったことが示唆されたと同時に、ビデオカンファレンスでは保育者の視点で活動を捉える傾向があることや子どもの内面の洞察が難しいことなどの課題が見出された。今後は、省察の重要性を更に伝えながら、子ども理解の深化を図る取り組みが必要であると考えられる。

### (キーワード)

省察、ビデオカンファレンス、模擬保育

### 1. 問題の所在と本研究の目的

昨今の子育て環境における著しい変化に伴い、平成20年に保育所保育指針及び幼稚園教育要領が改訂された。今回の改訂では、家庭環境や時代の変遷に即して新たな視点が数多く取り上げられているが、新保育所保育指針では新たな課題として、保育実践・研修などを通して保育者の専門性を高めていく必要性が挙げられている。すなわち、めまぐるしく変容する社会的状況である今こそ保育者の在り方が問われており、より高い資質や専門性が求められつつあると言えよう。

保育者の専門性に関する知見を概観すると、鯨岡（2000）は、①理論的専門性、②実践的専門性、③反省的専門性の3つの柱を挙げている。その中の反省的専門性は、明日の保育を創造する上で非常に重要であり、理論的専門性と実践的専門性を関連付けながら、反省的な吟味や評価が次の計画立案や保育実践の取り組みの質に反映されることを示唆している。また、津守（1997）は、保育実践の場では何が正解なのかという絶対的な基準もないことを踏まえた上で、保育者自身の行為が目目の子どもにとってどのような意味があったかということ子どものあるままの姿を通して問うていく保育者の「省察」の重要性を示唆し、保育の実践と省察とは切り離すことができないとしている。このような保育現場における省察を重視する理論的背景は、Schön.D（1983）によって提唱された「反省的实践家」という概念に起因している。実践の中で省察し、また実践後の振り返りを通して省察を重ねていくという保育者のPDCAサイクルは、明日の保育を創造しながら保育実践を積み重ねていく上で非常に重要であり、省

察なくして保育の専門性は語れないと考える。

このように保育者が自分自身を見つめ改めていく省察の思考プロセスは、現場の保育者のみに求められることではなく、将来保育者になることを目指している保育者養成段階の学生にとっても、その反省的専門性の礎を築く上で重要であると考えられる。昨今の保育者養成校においては「人間性を豊かにする学びや成長」に関する学習内容と「保育の専門的知識・技術」の習得とのどちらを重視するかという課題が挙げられているが（森上，2000）、人間性と知識技術の2側面で論じるのみでなく、子どもたちと実際に向かい合った際にそれらを包括しながら、子どもの行為をどう読み取りどのように援助を展開していくかが養成段階の学生に求められる専門性の基礎であると言えよう。その中で、上辺のテクニックや一見スムーズに保育を展開できることに捉われすぎることなく、その過程において子どもたちの感じ方や行為の意味に目を向けて子どもたちと心で向き合っていく重要性に気づけるよう支援することが、保育者養成校に求められる「保育の本質を伝えていく」という使命であると考えられる。特に、学生にとって子どもと直接かかわることができる「実習」という具体的実践経験は、子どもたちとのかかわりや指導者の助言から学ぶことで保育に対する自らの枠組みや姿勢を捉え直す契機となり、学生自身の保育に対する価値観が大きく変容していくことが期待できる。

筆者は、保育者養成段階における実習事前指導で「模擬保育」と「カンファレンス」に着眼し、子どもの内面理解を含む見とり力と子どもの実態に即して援助する即応力を実践力の柱と捉え、その双方を伸ばしていく取り組みを数年に渡って実施してきた（上村，2008，2009）。その結果、模擬保育を通して仲間と立案を共有したり意見を交換したりすることで、学生自身が新たな気づきを生み出していくことが見出されている。その反面、保育者の援助の在り方や活動展開に意識が向く傾向が強いため、子どもの内面理解にまで至ることが難しいという課題が浮き彫りにされており、活動の善し悪しを問うものでなく、特に子どもの様子に気づくことやその様子から思いを巡らせて省察する思考プロセスを体得していくことが重要であると考えられる。このような思考プロセスの獲得のために、保育実践の現場でも昨今「保育カンファレンス」が注目されている。

柴崎・田代（2002）は、保育カンファレンスとは、子どもの育ちをどのように支えていくかを話し合う中で自分の保育に対する枠組みを改める場であると提言している。つまり、子どもの行為の意味を捉えようとする際に保育者自身の物事の見方や判断の基準が妨げとなりその本質が分かりにくくなる場合があるが、保育カンファレンスを通して他の保育者と共に考えることで、子どもの思いをより深く知ろうとする姿勢を身に付けたり、自分自身の子どもの見方や捉え方を拡げていくことが期待できる。そして、実践を話し合うことで多角的な視点から保育を見ることができるようになり、独りよがりな見方を反省して実践を様々な視点から吟味する柔軟性と多様性を育てることにつながると考えられている。筆者自身もこのような見解に基づき保育カンファレンスを実施してきたが、実習前の学生は指導案をうまく書くことや活動を指導案通りに滞りなく進めることなどに意識が向く傾向が強く、スムーズに活動を進めるにはどうしたら良いか、予想外の出来事がおこった場合にはどのように対応すれば良かったかなど、保育者としての対応の仕方に着目しがちであることが見出されている（上村，2009）。しかし、出来事に即応できるということは、どのように対応するかというノウハウを数多く知っていることではな

## 実習事前指導における模擬保育ビデオを活用したカンファレンスの実際と効果

く、そこで起こっていることの意味を正しく捉えられることがより重要であると言えよう。

様々な保育カンファレンスを吟味する中で、大豆生田（1996）は、省察を高める手法として「ビデオカンファレンス」の有効性を示唆している。すなわち、ビデオ映像が持つ効果はとて大きく、VTRを見ることで出来事を冷静に見つめ直し、その意味を改めて省察することで自分の保育の枠組みを変える契機になりうると考えられる。また、中島（1996）はビデオ映像を学習場面で併用した際の学習促進効果を指摘しており、自己を振り返る方法としてビデオは客観的に自分の姿を見直せるという良さがあり、自己学習を促進する可能性を持っていると考えられる。このように、VTRは記録や再現が容易であり、情感を含めた内容や表情も音声や映像として画面に映し出されるため理解しやすく、客観的に事実を記録できるという利点から保育を検討する方法として有効であると考えられる。

このようなVTRの効果を取り入れた保育者対象の研究として、富田・田上（1999）は、幼稚園教員の幼児に対する援助スキル変容に及ぼすビデオ自己評価法の効果を検討するため、保育者が保育現場のVTRを観て自分自身の援助スキルについてチェックリストを用いて自己の援助について評価する方法を導入した研修を実施している。その結果、実施当初見られなかった援助スキルが使えるようになったことから、技能・技術の向上のためにビデオ自己評価法が効果的であったことを見出し、保育者自身の援助に焦点を当てたビデオ自己評価法は新しい研修方法として価値があると示唆している。このように、現場の保育者を対象としたビデオカンファレンスは園内研修の際に用いられつつあるが、保育者養成段階の学生に対するビデオカンファレンスについての研究例は見当たらず、学内に属している学生は子どもの姿など具体的事象を直接目の当たりにできないということが環境的な原因として考えられる。しかし、模擬保育とビデオカンファレンスを併用することで、子ども役となる学生に願いを寄せながら援助したり、終了後に対象学生から率直な意見を聴いたりすることが可能となり、映像を通して自身を振り返ったり他者の思いを感じ取る力を養うことができるという利点も考えられるだろう。そのような観点から捉えると、客観的に子どもの思いを推察するような園内研修型のカンファレンスよりも、子ども役となる対象学生からより感情的な思いを引き出せることが期待できる。また、保育者側の観点から活動を省察し、子ども役となる学生とのやりとりを通して保育者の援助や姿勢を問うていくことで、保育者養成段階から反省的専門性を高めていく可能性も含んでいると考えられる。

そこで本研究では、実習事前指導における模擬保育実践のVTR映像を見ながら考えを深めていくビデオカンファレンスを導入し、その取り組みの効果を検証することを目的とする。具体的には、ビデオカンファレンスの前後で学生自身の保育に対する見方がどのように変容したかという気づきの推移を中心に取り上げ、その思考の様相と要因を明らかにしていきたい。また、実習事前事後において実習に関する自己評価を実施することで、ビデオカンファレンスを通じた学びが実際の実習場面でどのように活かされたかについて明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究方法

### 1) 模擬保育とビデオカンファレンスの実際について

本研究の対象は、愛知県 J 保育専門学校福祉保育学科 2 年生 26 名（男子 12 名・女子 14 名）である。保

育実習Ⅱ終了後の2008年10月から2009年2月に、「教育実習事前指導Ⅱ」において下記の通り5回の模擬保育を実施し、3年生の教育実習Ⅰ（4月：1週間）・教育実習Ⅱ（6月：3週間）を想定して取り組んだ。また、各模擬保育においてその映像を活用したビデオカンファレンスを翌週実施し、テーマに沿って意見を交わし合う時間を設けた。

学生は、保育内容の5領域に基づいたグループに自己選択に応じて所属し、新幼稚園教育要領における領域のねらい・内容を熟読した上で、各領域に即した30分程度の活動を考案した。実践グループ（1グループ）は、CT（Chief Teacher）1名・ST（Sub Teacher）1名・抽出児（気になる子）2名を設定し、子どもの姿を予想しながら立案・実践を行い、参加グループ（残り4グループ）は対象年齢の子ども役になりきって活動に参加した。年齢設定及び活動実施時期は学生が主体的に設定し、6月の教育実習Ⅱを想定した活動を設定しても良いことを事前に説明した。各立案に基づいた30分の模擬保育終了後、各自気づきを模擬保育ワークシートに記入し、その後グループワークで意見交換を行った。また、各保育では設定したねらいの達成度について参加学生全員で評定をし（Range＝0～10）、ねらいの達成度平均値を算出して子ども役側から見たねらいの達成状況について、翌週フィードバックをした（表1）。

表1 各模擬保育の活動内容及びカンファレンステーマ

領域	健康	表現	環境	人間関係	言葉
設定年齢	5歳児（6月）	4歳児（12月）	5歳児（1月）	5歳児（1月）	4歳児（6月）
活動	<集団遊び> 忍者しっぽとり	<集団遊び> 3匹の子ブタゲーム	<描画遊び> 木を描いてみよう	<集団遊び> 野菜バスケット	<言葉遊び> カード伝言ゲーム
ねらい達成	8.0	5.5	8.2	6.0	6.1
翌週の カンファ レンステ ーマ	子どもが遊びに夢 中になることとル ールを守ることに ついて	子どもの表現力を 引き出す援助に ついて	自然の不思議さに 興味を持てるよう な援助について	自己主張が強い 子どもの心の内側 を読み取るには	話に耳を傾けて 聞く力を育てる 援助について

また、活動風景は全体の子ども・抽出児の様子・保育者の姿がそれぞれ均等にバランス良く撮影するよう配慮しながら筆者がVTRに収録し、後日ビデオ分析を行った。回収した模擬保育ワークシートに記述された意見と照らし合わせて、学生の気づきを出発点とした内容をカンファレンステーマとして抽出した。特に、ビデオ鑑賞を通して学生に見つけてほしいテーマを投げかけるよう配慮しながらビデオカンファレンスを実施し、学生はカンファレンスを通じた気づきを自由記述でカンファレンスワークシートに記入した。また、ビデオカンファレンス及びグループワークにおける留意点として、森上（1998）の見解を踏まえ、①正解を求めようとしないこと、②本音で話し合うこと、③相手を批判したり意見の優秀性を競い合ったりしないことの3点を事前に伝え、留意するよう指導した。

## 2) 調査方法及び評価方法

### I) 模擬保育ワークシート及びカンファレンスワークシートから得られた気づき

模擬保育及びビデオカンファレンスでどのような気づきを得られたかを検証するために、①模擬保育ワークシートにおける自由記述、②カンファレンスワークシートにおける自由記述から、内容ごとにカテゴリー分析をした。特に、「実践（参加）直後の気づき」「グループワーク後の気づき」「ビデオカンファレンス後の気づき」の3点に着眼して、その内容を明らかにすると同時に学生の視点の傾向を探った。

### II) 模擬保育・ビデオカンファレンスを通じた全体的な学び

全授業終了後に、模擬保育及びビデオカンファレンスにおける効果を検証するための質問紙調査を実施した。「実践」「参加」「グループワーク」「ビデオカンファレンス」「全体」に関する全25項目について「そう思う～そう思わない (Range=1～4)」の4件法で回答を得た (回収率100%)。

### III) 実習事前事後における自己評価調査の差異

実習に関する自己評価について兼房 (2007) を一部参考にした質問紙調査を実施した。模擬保育開始直前の2008年11月 (A期) と最終実習終了後の2009年7月 (B期) に同様の質問紙調査を実施し、本取り組みが実習のどのような点で活かされたかを検証するため実習前後の差異に着目した。調査項目は、実習における「幼児及び指導の理解」「指導計画と立案」「指導の実際」「指導計画及び実践の評価」「基本的職務・意欲・態度」の5領域に関する全35項目について「そう思う～そう思わない (Range=1～4)」4件法で回答した。また、実習終了後 (B期) には、実習における模擬保育・ビデオカンファレンスの有効性に関する自由記述調査を実施した (回収率96,2%)。

## 3. 結果と考察

### 1) 模擬保育ワークシートから

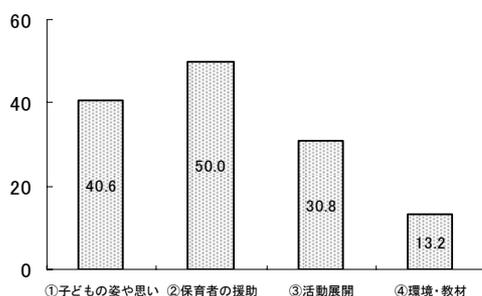


図1 模擬保育直後の気づき内容の分類 (平均値)

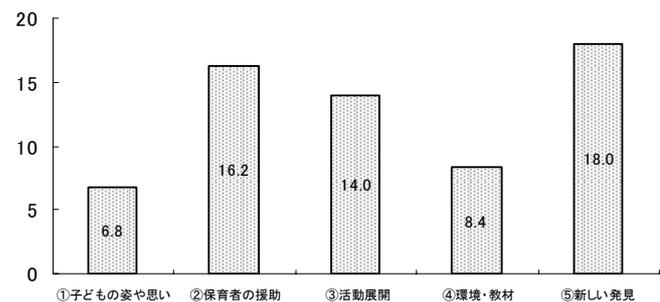


図2 グループワーク直後の気づき内容の分類 (平均値)

全5回の模擬保育後の気づきに関する記述 (S=673) を分類した結果 (図1)、子どもの姿や思い (S=203, 30%)・保育者の援助 (S=250, 37%) に関する気づきが、他の気づきより有意に多かった ( $\chi^2(3)=110.2, p<.01^{**}$ )。よって、保育実践及び参加の直後は、子どもの立場で感じたことを出発点とした子どもの思いや実践者 (保育者) の援助に着目し、気づきを深めていく傾向があると考えられる。

また、グループワーク後の気づきに関する記述 (S=317) を分類した結果 (図2)、話し合いから生ま

れた新しい発見 (S=90, 28%) ・保育者の援助 (S=81, 26%) ・活動展開 (S=70, 22%) に関する気づきが他の気づきよりも有意に多かった ( $\chi^2(4)=37.6, p<.01^{**}$ )。すなわち、グループワークの話し合いを通して、他者の意見を聞いて自分が気づけなかった点に気づいて考えを深めていくこと、または保育者の援助や活動展開の在り方へ視点が移行していく傾向が見出された。

## 2) ビデオカンファレンスワークシートから

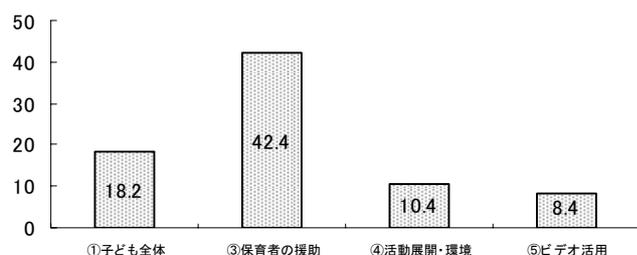


図3 ビデオカンファレンス後の気づき内容の分類 (平均値)

ビデオカンファレンス後の気づきに関する記述を (S=397) を分類した結果 (図3)、保育者の援助に関する気づきが全体の53%を占めており、他の気づきよりも有意に多かった ( $\chi^2(3)=184.3, p<.01^{**}$ )。すなわち、模擬保育終了から1週間経過した後のビデオカンファレンスでは、より客観的な視点から保育者の

援助の在り方に着目する傾向が見出された。また、子ども全体 (S=91, 23%)、保育者の援助 (S=212, 53%)、活動展開・環境 (S=52, 13%)、ビデオ活用自体 (S=42, 11%) の詳細な気づきに関しては、下記のような記述が見られた (表2)。

表2 ビデオカンファレンス後における気づきの内容 (ワークシートより一部抜粋・◎は実践グループ学生の記述)

子ども全体	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「あの子があんな行動していたのは何故？」と考えることができた。</li> <li>・M子は「どういう気持ちで発言・行動しているのかな？」と思った。</li> <li>・抽出児M子は、実は無理して頑張って活動に参加していることがわかった。</li> <li>・絵を描く時に、みんながすぐに描けるわけではないということがわかった。</li> <li>・葉っぱの液を使って絵を描いた子を見て、実際の子どもももっと色々な発想ををすると思う。</li> <li>・T子には先生の背中しか見えてないと感じた。</li> </ul>
保育者の援助	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎自分の言葉は分かりづらく、身ぶり手ぶりが少ないことに気づいた。</li> <li>◎VTRを見て、子どもが導入で飽きてしまうほど説明が長いことに気づいた。</li> <li>・改めて見ると、CTが抽出児に願いを込めて援助していることに気づけた。</li> <li>・ルール説明は伝えたいところを強調して子どもが興味を持てるようにしたら、しっかり聞いて理解できたと思う。</li> <li>・M子の「誰かいないと嫌だ」の一言に対してCTがそっと隣に座った行為は、自分にはできない行動だと思った。</li> <li>・説明時に実際に動作で説明をしていたので、4歳児は耳で聞くより目で実際に見て聞く方が伝わるので良いと思った。</li> </ul>
活動・環境	<ul style="list-style-type: none"> <li>◎同じゲームを3回繰り返さず、少しずつルールを変えてレベルを上げていくと更に盛り上がったと思う。</li> <li>◎絵本を見てから絵を描く準備をしていたら、せつかくのイメージが消えてしまうと思った。</li> <li>・視覚的教材を導入で使うと、とても分かりやすいということを改めて感じた。</li> <li>・今回は「イメージ&lt;実物」だったので、木の模様・枝の節・色合いなどにも気をつけたら良かった。</li> <li>・私のグループの木には葉っぱがついていなかったの、葉っぱつきの木があることを初めて知った。</li> <li>・このゲーム展開では、鬼にならなかった人が偉いのか？ 他の子たちはどうなるのだろう？と思った。</li> </ul>

## 実習事前指導における模擬保育ビデオを活用したカンファレンスの実際と効果

ビデオ活用	<p>◎ビデオは、自分以外の視点で見られるので新しい発見があった。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・参加するのとビデオで見るのとは全く違い、改めて見ることで考え直したり視野を広く見ることができて良かった。</li> <li>・自分の動きを見直すことができるし、違った援助を客観的に考えることができる。</li> </ul> <p>◎自分を見るのは恥ずかしかったが、反省点・改善点をVTRで見ることでわかったから良かった。</p> <p>◎必死に声をかけている子どもの対応に気づけなかった自分に気づけた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な意見を聞いてみんな色々意見があることが分かり、本当に楽しく学べるし実践に役立つ話ばかりだと思った。</li> </ul>
-------	---

## 3) 授業後アンケートから

授業後アンケートにおいて未記入回答の多かった志望意欲向上（質問項目25番）を欠損項目として取り扱った上で、24項目の平均及び標準偏差を検討した結果（図4）、全体的に高得点が得られた（Mean=3.34, SD=0.40 Range=1～4）。そこで、全得点の素点分布からMean±1SDの項目に着眼し、Mean+1SD（3.74）以上の項目をH群項目、Mean-1SD（2.94）以下の項目をL群項目として抽出し、その内容を比較した（表3）。

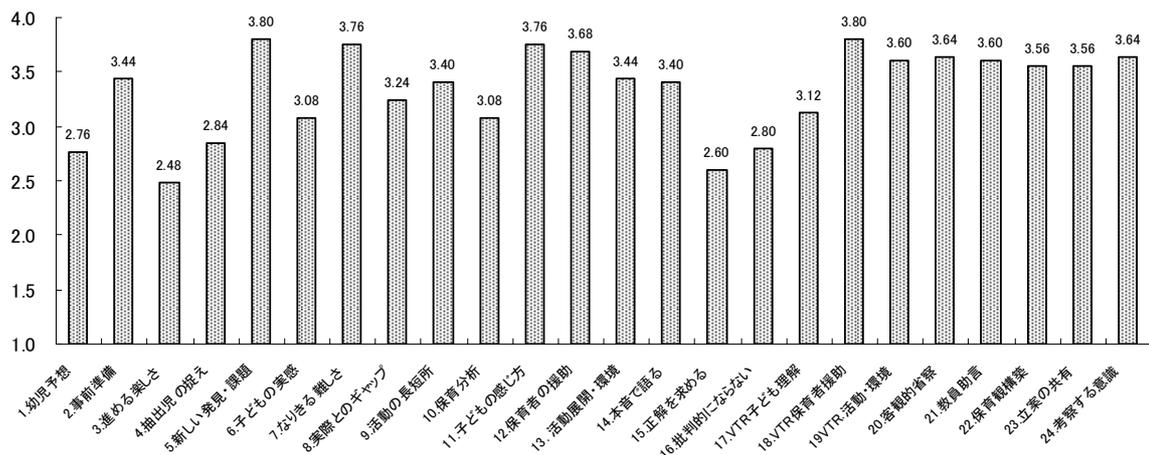


図4 授業後のアンケート得点 (平均値)

表3 授業後アンケート得点におけるH群・L群に関する項目 (平均値)

群	項目	調査項目 (平均値)
H群	実践	5) 模擬保育を実践して課題や反省・新しい発見が多く、学ぶことが多かった (3.80)。
	参加	7) 模擬保育に参加して、子どもになりきることや子どもの目線で感じ取ることの難しさを感じた (反対項目: 3.76)。
	GW	11) グループワークで話し合うことで、様々な子どもの感じ方に気づくことができ、役に立った (3.76)。
	VTR	18) ビデオで振り返ることで、保育者の思いや援助の良さ・改善点に気づくことができた (3.80)。
L群	実践	1) 模擬保育を実践することで、幼児の姿を予想しながら指導案を作成することができた (2.76)。
		3) 模擬保育を実践することで、子どもの前に立って保育を考えたり進めたりする楽しさを感じられるようになった (2.48)。
		4) 模擬保育を実践することで、気になる子 (抽出席) の動きを的確に捉え、感じ取ることができるようになった (2.84)。
	GW	15) 班で話し合う時に、どうしても正解 (こうした方がいいという考え) を求めてしまうような気がした (2.60)。
		16) 班で話し合う時に、批判的な考え (ここがダメとかこうするべきなど) が多かった気がした (2.80)。

まず、模擬保育の実践を通して新しい課題や発見を見出すことができたと感じる一方で、子どもの姿を予想した立案や抽出児の見とりが難しく、保育を進める楽しさを味わったり子ども目線で感じたりすることも難しいと認識する傾向が多かったと考えられる。しかし、参加時には子どもの立場に立って感じたりすることが難しかったとしても、グループワーク時で話し合う際には、正解を求めたり批判的になったりせずに有意義な意見交換ができ、その中で互いの子ども役としての思いを表出し、様々な子どもの感じ方や思いに対する理解を深めていくと考えられる。さらにビデオカンファレンスについて着目すると、VTRを通して活動展開上の課題点や環境構成などに気づくことができた（3.60）、客観的に保育を振り返ることができ（3.64）、またVTRを活用しながら筆者の話聞くことが参考になった（3.60）など、全体的に得点が高かった。しかし、学生が子どもの内面理解（3.14）よりも保育者の援助（3.80）に着眼する傾向が見出され、VTRを見る中で子どもよりもむしろ保育者の援助や活動などその一連の流れに目が向きやすく、新しい気づきをもたらすと考えられる。

#### 4) 実習事前事後における自己評価得点の差異

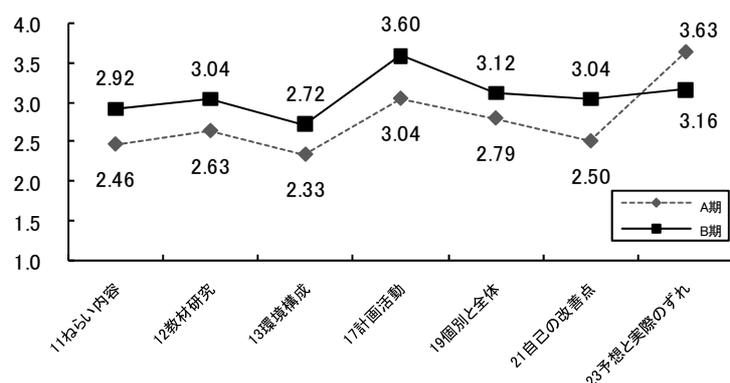


図5 実習事前事後における自己評価得点の差異（平均値）

実習事前事後の差異に着眼して、各質問項目の平均値についてt検定を行った結果（図5）、左記の6項目について有意差及び有意傾向が見られた。すなわち、ねらい及び内容 ( $t=1.82, p<.05$ ) 教材研究 ( $t=1.31, p<.10+$ ) 環境構成 ( $t=1.73, p<.05*$ ) 計画活動 ( $t=2.06, p<.05*$ ) 個と全体の見とり ( $t=1.42, p<.10+$ ) 自己の改善点 ( $t=1.98, p<.05*$ ) において、実習前のA期より実習後のB期の方が高く、予想の実際のずれ ( $t=2.33, p<.05*$ ) に関しては実習前のA期より実習後のB期の方が低かった。以上の結果から、模擬保育及びビデオカンファレンスを経験した学生は、実際の実習場面では子どもの実態を踏まえてねらいや内容を考えたり、教材研究や環境構成ができるようになったと推測できる。また、活動を最後まで進める上で個別の関わりと全体の把握を意識して動くことができ、子どもの姿に対する予想と実際のずれも少なくなり、子どものかかわりの中で自身の良さや改善点に気づけたと考えられる。

#### 5) 実習現場における模擬保育・ビデオカンファレンスの有効性について

実習終了後に行った自由記述を分析した結果、実習における模擬保育の有効性 ( $S=40$ ) については、①実践における見通しやゆとりの向上、②立案力の向上、③声かけなどかかわり方の技術獲得、④遊びのアイデアの広がり、⑤環境構成の重要性に分類され、一度模擬保育を体験したことでゆとりと自信を持って実習に臨むことができたと推測できる。また、本稿で注目すべきビデオカンファレンスの有効性 ( $S=30$ ) については、①ビデオを通じた省察の深まり、②視点の広がり、③保育技術の獲得に大別され

## 実習事前指導における模擬保育ビデオを活用したカンファレンスの実際と効果

た。下記のような詳細な記述が得られたことから（表4）、省察の深まりや視野の広がりを自身の糧として吸収した上で、保育技術として実践に活かしながら実習に臨むことができたと考えられる。

表4 実習後のビデオカンファレンスの有効性に関する自由記述（一部抜粋）

①「ビデオを通した省察の深まり	②視野の広がり	③保育技術の獲得
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の保育を見ることで反省点を活かした保育ができた。</li> <li>・各グループの良さや改善点を参考に立案できた。</li> <li>・子どもの行動・言動の意味をよく考えながら実習ができた。</li> <li>・良い点として挙げた姿を思い出しながら、前向きに全日実習に臨めた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習でも色々な視点から物事を捉えることができた。</li> <li>・様々な観点から実践を確認することで、実習での声かけに活かした。</li> <li>・立案時に予想される姿がたくさん浮かぶようになった。</li> <li>・自分が気づけなかった子どもの動きに気づけるようになった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ビデオで見た他の人の保育の仕方からアイデアをもらって実践できた。</li> <li>・声の張りや大きさに気づけ、実習でも心掛けることができた。</li> <li>・導入やまとめの大切さが分かり、(実習で)活かすことができた。</li> <li>・子どもへの興味を持たせ方が参考になり、実習で実践できた。</li> </ul>

#### 4. 総合的考察と今後の課題

本研究結果より、模擬保育ビデオを活用したビデオカンファレンスの学びと実習における有効性に関して、以下の2点に関する知見と課題が見出された。

##### 1) 学生の保育を捉える観点の推移について

模擬保育直後は、学生が子どもの姿や保育者の援助に着目する傾向が強かったが、その後のグループワークを通して新たな見方を発見したり、活動展開や保育者の援助の在り方について見つめ直すという視点へ移行する傾向が明らかになった。この結果から、実践及び参加直後はその活動に対する実践者としての保育者側の視点や参加者として子ども側の視点で活動を捉え、より個人的な心的感情から出発した気づきや発見を見出す傾向があると考えられる。しかし、その後のグループワークにおいて、参加者(実践者)としての気づきを伝え合うと同時に仲間からの意見を聞き合う中で、様々な意見に共感したり新しい刺激を受けたりしながら参加者(実践者)としての私から乖離し、客観的な視座から保育活動自体を見つめ直したりその活動における保育者の在り方へ視点が移行していくと推測できる。同様に、ビデオカンファレンスにおける気づきの結果を重ね合わせると、保育実践に参加していた私(もしくは実践していた私)から、客観的にビデオを鑑賞する私としての着眼点で保育活動を見つめ、その中で保育者の在り方を模索していることが窺われる。これらの結果から、保育を捉える思考が保育者視点に推移していく背景には、次の2つの要因が考えられる。

まず1点目として、保育者を目指す向上心などの意欲要因が考えられる。実習を直前に控えた学生は、「実習で失敗したくない」「上手く保育を展開していきたい」などの意識が強く、積極的に吸収しようとする姿勢が見受けられる。実際に、模擬保育に参加していた時には「保育される私」として存在していた学生が、ビデオカンファレンスの場で冷静に保育を捉える際には、「自分だったらどのような援助をするか」「こうしたらもっと子どもの良さが引き出せるのではないか」など、保育者の立場にすり替わっ

て改善案を模索する様子が見受けられた。また、「改めて見ると保育者が自分の気づかない場面で寄り添った援助をしていたことに気づいた」など、ビデオで再度活動を見つめ直すことによって、参加時には気づけなかった自分以外の子ども役への配慮や援助などに気づいたり共感したりする様子も見られ、新しい発見を契機に仲間の実践の良さを吸収して自分の枠組みに取り込もうとする意欲も見受けられた。よって、ビデオカンファレンスではこのような学生の向上心が反映した結果、保育者観点で捉えるよう推移したと考えられる。

また、2点目として時間的要因が挙げられる。保育活動の楽しさや難しさを学生自身が体感した直後は、その湧き上がる個人的感情が学生自身の心情として反映されやすく、気づきも自身の心的感情に即したものや本当の子どもでもあったら（実際の〇歳児であったら）どうであったかなどの観点で捉える記述が多かった。しかし、グループワーク後の気づきでは新しい発見に関する内容が最も多かったことから、仲間の考えを聴くことで学生自身がその瞬間は感じるができなかった他者の心情や観点に気づき、他者の意見を通して自分の保育への見方を広げながら、学生自身の保育の捉え方の枠組みを少しずつ変容させていくことが推測される。この模擬保育終了直後からグループワーク終了に至るまでの経過時間は僅か30分程度であるが、この時間の中で保育を捉える思考プロセスは主観的視点から客観的視点へと推移し、自身の内的心情から少しずつ乖離していくと考えられる。また、今回特に注目したい点は、ビデオカンファレンスにおける学生の気づきの多くが、保育者の援助の在り方を問うものであったことである。これは、授業の枠組みの関係上ビデオカンファレンスの実施が模擬保育実践から1週間経過していたことが要因と1つとして挙げられるだろう。すなわち、1週間という時間的経過に基づき、保育活動直後に感じた新鮮な気づきからさらに客観的な視点へと乖離し、保育を改めて見つめ返すといった姿勢で翌週ビデオカンファレンスに臨んでいたことが窺われる。このように、保育実践から時間が経過するにつれて、活動直後に湧き上がる主観的な思いや気づきが冷静な視点から見つめるという観点へ切り替わっていくことが考えられる。より客観的な視点から保育を見つめ返すことによって、「保育をする私」「保育される私」から「保育を見つめるもう一人の私」に立場を変えることが可能となり、冷静かつ厳しく見つめながら保育者の反省的専門性を高めていくことが推測される。

## 2) 模擬保育のビデオ映像を活用したビデオカンファレンスの効果について

授業後アンケート結果から、ビデオカンファレンスの有効性については全体的に高い数値が見出された中で、特に保育者の援助に関する良さや改善点への気づきが高かったことが明らかになった。また、実習後自己評価及び自由記述回答から、個と全体の見とりが向上したこと、予想される子どもの姿と実際の子どもの姿のずれが減少したこと、また自己の良さや改善点の発見が向上したことが明らかになった。以上の結果を踏まえると、それぞれの取り組みにおいて、下記のような学びの道筋が考えられる(図6)。

## 実習事前指導における模擬保育ビデオを活用したカンファレンスの実際と効果

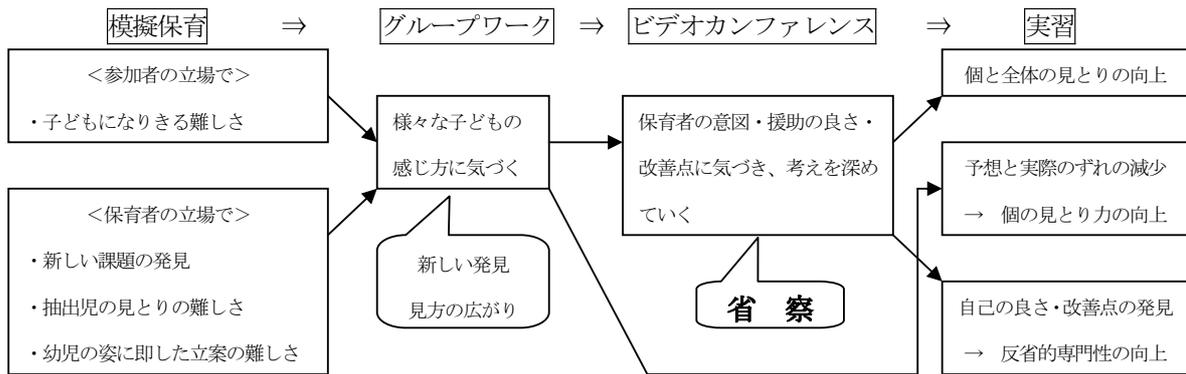


図6 模擬保育及びビデオカンファレンスにおける学びと実習への効果

上記の図に示した通り、模擬保育を経験することで参加者及び保育者の立場から感じ得た発見や難しさを契機に、学生は課題意識を持ってグループワークに参加できたと考えられる。その後、他者と意見を交わし合うことで、子どもの感情面における新たな発見を得ることができ、その結果「子ども理解」という観点から予想される子どもの姿の幅を広げることが可能となり、実習場面においても予想される子どもの姿を膨らませながら立案及び実践に当たることができたと考えられる。一方、ビデオカンファレンスにおいてテーマに沿って客観的視点から保育者の在り方を省察した結果、実習場面では「個を見つめながら全体を掌握する」という保育者が活動を展開する上で不可欠な視点のバランス感覚を体得したり、自身の活動を見つめ返してその良さや課題を発見したりしながら、省察の根本となる反省的専門性を徐々に向上させていくと推測できる。このように、実習場面における実践力は、ビデオカンファレンスに基づく省察によってのみ向上するのではなく、模擬保育実践やグループワークにおける保育者及び参加者の主観的な感情から得た気づき実践知として反映され、学生たちに浸透していることが窺われる。よって、模擬保育及びビデオカンファレンスの一連の流れは、模擬保育実践を通して難しさや発見などを体感するに留めず、それを保育者としての省察へと結び付け、実習という実践現場へ転用させていく可能性が明らかとなり、本取り組みは保育者養成段階の学生に対してもある程度効果的であることが示唆された。

本研究では、ビデオカンファレンスでは保育者の援助の在り方に最も意識が向く傾向が見られたが、保育実践の現場における保育者の援助とは子どもへ一方通行に与え続けるものではないだろう。むしろ、一人ひとりの子どもの内面理解を出発点として、そこで起きている出来事の意味や子どもが感じている心情を捉えるというプロセスを経て、保育者が子どもに共感・受容し、願いを寄せながら適切な援助がアクションとして生じるものと考えられる。すなわち、保育者の省察を深めていくためには、子どもの思いを読み取るという「子ども理解」を軽視できない。保育者が上手くスムーズに援助ができたとしても、それが表面的で形式的な援助に留めることなく、子どもたちの心情に寄り添い心が通い合っただけで、援助として成立するのではないだろうか。その保育の本質を見失ったまま、映像上ビデオに映し出された援助の善し悪しを問うのではなく、子どもの心情理解を踏まえた上での保育者の在り方を模索していくことが、学生たちに求めるべき今後の課題であろう。

大豆生田（1996）によると、ビデオ映像はその一部を切り取ってしまう危険性を含んでおり、保育の全体像を捉えることが難しいという見解を示している。本研究でも、子ども・保育者・保育活動全体の3種類のアングルによる撮影のバランスに留意したが、保育活動の導入部分など全体の子どもたちの興味・関心を引き出す場面は保育者に焦点を当てた撮影を試みていた。ビデオカンファレンス後の気づきで、保育者の導入における説明の解りやすさや導入の重要性などに関する内容が多かったことを考慮すると、撮影上ビデオが切り取った映像の断片的な着眼点そのまま学生の気づきの観点へ反映した可能性も排除できないだろう。よって、今後の課題としては、保育者のみに焦点を当てたビデオカンファレンスを展開するだけでなく、子どもの姿に焦点を当てたビデオカンファレンスも並行して実施し、子ども理解の深化を図るような取り組みが必要であると考え。特に子どもの心的感情に焦点を置いたテーマを設定することで、園内研修におけるケースカンファレンスのような子どもの心の動きやありのままの姿を捉えることに着目し、子どもの思いを読み取ったり紡ぎ出したりしながら豊かな発想力や柔軟性を高めていくことが重要であろう。そこから、保育の本質を学生自身で読み解きながら省察を重ね、それらの意味や価値を導き出せるような保育者の資質を今後も育成していきたい。

## 参考文献

- 大豆生田啓友 1996 保育カンファレンスにおける語りとビデオ 発達68 ミネルヴァ書房 P.17-22
- 中島義明 1996 映像の心理学 マルチメディアの基礎 サイエンス社 P.114-115
- 津守真 1997 保育者の地平 一私的体験から普遍に向けて一 ミネルヴァ書房 P.293-294
- 森上史朗 1998 実践の省察とカンファレンス 幼児教育への招待 ミネルヴァ書房 P.156-157
- 富田久枝・田上不二夫 1999 幼稚園教員の援助スキル変容に及ぼすビデオ自己評価の効果 教育心理学研究 第47巻 P.97-106
- 鯨岡峻 2000 保育者の専門性とはなにか 発達83 ミネルヴァ書房 P.53-60
- 森上史朗 2000 保育者の専門性・保育者の成長を問う 発達83 ミネルヴァ書房 P.68-74
- 柴崎正行・田代和美 2002 育児・保育現場での発達とその支援 ミネルヴァ書房 P.186-197
- ドナルド・ショーン（訳）佐藤学・秋田喜代美 2007 専門家の知恵 反省的实践家は行為しながら考える みゆる出版
- 兼房律子 2007 幼稚園教育実習自己評価にみる学生の学びと課題 一学生の現状と教育実習事前事後指導に関する一考察一 日本保育学会第60回大会発表論文集 P.1412-1413
- 上村晶 2008 幼稚園実習で求められる実践力を考える ～模擬保育及び保育カンファレンスを中心とした事前指導と実習後自己評価に関する一考察～ 日本保育学会第61回大会発表論文集 P.751
- 上村晶・布谷光俊 2009 実践力の向上を目指した教育実習事前指導の在り方についての実証的研究 中部大学現代教育学研究紀要 第2号 P.53-64